二〇一三年一月二三日（能勢炭焼き参加者一二名）

幣立てて菊炭の窯守りけり　菜々
里山の櫟を守りて炭を焼く　〃
寒詣磴は胸突き七曲り　〃
小屋開いて百の農具は春を待つ　〃
昨夜雨に椎茸榾は春子吹く　〃
窯二つ阿吽に並ぶ炭焼き場　うつぎ
あんぐりと台場櫟の洞ぬくし　〃
炭出しを控へて窯の黙しをり　〃
煤まみれ夫唱婦随に炭を焼く　〃
猪の罠風倒木に隣りけり　有香
寒々と廃屋残る行者道　〃
寒林の中も郵便配達区　〃
春泥の轍ぐちゃぐちゃ網模様　〃
菊炭の窯を守りて半世紀　よし子
苔むして石みな仏寒詣　〃
炭斗に菊花模様の炭並ぶ　〃
春泥に靴底重くなりにけり　〃
厳冬と言へど行場の苔青し　哲子
猪の罠かけある河原背ずり痕　〃
注連古りて瘤あまた持つ大枯木　〃
炭を切る嫗の鼻の煤よごれ　〃
能勢四温台場くぬぎの枝伸ばす　雅流
絶やすまじとて炭を焼く老夫婦　〃
明日出すといふ炭窯の眠るごと　〃
炭焼を誇りとしたる生計かな　よう子
斎垣の区切る聖域冴えにけり　〃
猪鍋の看板の立つ深山道　かかし
春泥の庭を闊歩すちゃぼをかし　小袖
堆く廃屋包む枯落葉　満天
窯出しを待つ炭窯のほのぬくし　はく子
炭を焼く妙見さんの懐に　〃
間歩あとの穴明神に春の雨　〃
明日出すといふ炭窯の香の仄と　〃

吟行句会みのる選

二〇一三年一月二三日（能勢炭焼き参加者一二名）